

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	食物アレルギーをもつ子どもとそのきょうだいを育てる母親の子育て力向上を目指したプログラム開発
別タイトル	The program development for improving child rearing skills of mothers with food allergic children and their siblings
作成者（著者）	石川, 紀子
公開者	東邦大学
発行日	2018.09
掲載情報	東邦大学大学院看護学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨.
資料種別	学位論文
内容記述	主査 :出野慶子 / タイトル : 食物アレルギーをもつ子どもとそのきょうだいを育てる母親の子育て力向上を目指したプログラム開発 / 著者 : 石川紀子 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第898号
学位授与年月日	2018.09.10
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD28097742">https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD28097742</a>

# 博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

# 博士論文要旨

看護学研究科看護学専攻 基礎・実践看護学 分野	学籍番号 ND15001 氏名 石川 紀子
論文題目	食物アレルギーをもつ子どもとそのきょうだいを育てる母親の子育て力向上を目指したプログラム開発
<b>【研究の背景】</b> 食物アレルギー（以下、FA とする）は、アレルゲンとなる食物の摂取や接触によって皮膚症状が出現したり、呼吸困難やアナフィラキシーショックに陥る場合もある。そのため、FA をもつ子ども（以下、FA 児とする）を育てる母親は日々の生活の中で FA 児の食事管理や生活環境の調整が必要となり、きょうだいの状況に目を向けることが難しい。欧米では、慢性疾患や障害をもつ子どものきょうだいに対して直接的な支援が行われているが、日本では慢性疾患をもつ子どものきょうだいへの体系的な支援は行われておらず、きょうだいへの直接的支援は難しいため、母親を介してのきょうだい支援に着目した。	
<b>【研究目的】</b> 食物アレルギーをもつ子どもとそのきょうだいを育てる母親の、子育て力向上を目指したプログラムを開発し、その効果を検討する。	
<b>【用語の操作的定義】</b> 本研究において食物アレルギーをもつ子どもとそのきょうだいを育てる母親の子育て力とは、「食物アレルギーをもつ子どもの健康管理を行える力、きょうだいが置かれている状況や自身の関わりについて振り返る力、きょうだいに生じている影響に意識的に関わる力、食物アレルギーをもつ子どもときょうだいの生活環境を調整していける力」と定義した。	
<b>【研究方法】</b> 1. <b>研究デザイン</b> ：1 群事前事後テストデザインに沿った介入研究 2. <b>対象者と調査期間</b> ：FA 児とそのきょうだいを育てる母親で、第二子以降の子どもが FA 児であり、きょうだいの年齢は 3 歳以上小学生以下とした。1 グループを 6～8 名とし、2 グループの 14 名を対象に、2017 年 9 月～12 月に調査を行った。 3. <b>介入プログラム</b> ：1 回 90 分で合計 3 回、各回で異なるテーマを設定し、①各回のテーマに沿った情報提供、②参加者による振り返りの機会、③参加者同士のグループディスカッション、④きょうだいへの関わりについての目標を考える機会の 4 つで構成した。 4. <b>調査方法</b> ：参加者の背景、FA 児の FA 症状、母親の子育て自己効力感、プログラムに対する意見について質問票を用いて調査した。また、第 1～3 回目のプログラム実施時に、参加者の発言内容を IC レコーダーで録音し、データとした。 5. <b>分析方法</b> ：各回のプログラムの目標達成の状況、プログラム参加後の母親の行動の変化、子育てに対する自己効力感、および FA 児の FA 症状の出現状況について分析した。	
<b>【倫理的配慮】</b> 対象者に、研究の趣旨、途中辞退ができることについて口頭と文書で説明し同意を得た。本研究は、東邦大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。	
<b>【結果】</b> 1. <b>各回プログラムの目標に対するグループディスカッションの内容</b> 第 1 回目では、きょうだいが置かれている状況として [FA 児の健康管理に伴い、きょうだいに我慢をさせている状況]、[外食の機会の減少]、[FA 児の健康管理に伴うきょうだいの協力]、親の関わりとして [きょうだいの食事への影響を軽減するための工夫や配慮] 等が振り返られた。今後のきょうだいへの関わりについて [親の思いをきょうだいに伝えていく]、[きょうだいへの	

関わり方を変えていく]等の考えが述べられた。第2回目では、人的・社会的サポートの活用方法として〔きょうだいFAを気にせず食事や遊びを楽しめるための調整〕等の考えが述べられた。第3回目では、きょうだいの食生活の影響に対する工夫や調整として〔きょうだいのおやつの影響を軽減するための工夫〕や〔きょうだいとFA児が共に食事を楽しめるための工夫〕等の考えが述べられた。

## 2. プログラム参加後の母親の行動の変化

【きょうだいに生じている影響に意識的に関わった行動】として、きょうだいの食事の希望をかなえる、外食の機会を設けるといったきょうだいの食生活に注目した関わり、きょうだいの気持ちを確認する、親の思いをきょうだいに伝えるといったきょうだいの心理面を意識した行動をとることができていた。【FA児ときょうだいの生活環境を調整した行動】として、家族全員で食事を楽しめるための調整や、きょうだいの交友関係に支障をきたさないための調整が行えていた。

## 3. FA児の健康管理における母親の行動とFA症状

母親はFA児の誤食を防ぐための対応や、FA児の健康管理のための食事作りを継続することができていた。FA児のFA症状の出現状況については、経口免疫療法を実施している6名のFA児のうち、4名にグレード2以上の症状が出現していた。

## 4. 子育てに対する自己効力感

子育て自己効力感尺度の総得点では、プログラム参加前後で合計得点が高くなった参加者は6名、変わらなかった参加者は2名、低くなった参加者は6名であった。

### 【考察】

#### 1. 各回のプログラムの目標達成

プログラムのプロセス評価として、各回のプログラムの目標とグループディスカッション内容を照合した結果、2グループとも各回の目標を達成することができていた。

#### 2. プログラムの効果の検討

1) 母親はFAによるきょうだいの食事に関する影響、心理面への影響、FA児が食べられないことに対するきょうだいの思いやりや協力の側面から、きょうだいが置かれている状況や自身の関わりについて気づくことができていたことより、〔きょうだいが置かれている状況や自身の関わりについて振り返る力〕は向上していたと考える。この要因として、自分たちの家庭や日常生活を具体的にイメージできる情報提供の内容や、振り返る機会を積み重ねることが影響していると考えられた。

2) きょうだいの食生活で生じている影響に対する関わり、きょうだいの日常生活とFA児の健康管理の折り合いをつけていくための調整、きょうだいの心理面に注目した関わりが行われたことより、〔きょうだいに生じている影響に意識的に関わる力〕および〔FA児ときょうだいの生活環境を調整していける力〕は、向上していたと考える。この要因として、目標シートを用いて実施可能で具体的な目標を参加者に設定してもらったこと、グループを対象としてプログラムを実施することでピアサポートの効果が影響していると考えられた。

3) きょうだいの生活や心理状況に注目していても、母親はFA児の症状出現を避けるために、アレルギーとなる食物の除去を行うことができていた。しかし、経口免疫療法の治療等の影響で、FA児の症状が出現する場合もあることから、母親の健康管理を行う力は症状の出現状況だけでは説明できないと考えられた。

#### 3. 子育てに対する自己効力感

プログラム前後で変化がなく、3ヶ月というプログラムの実施期間や、本研究における子育て力と尺度の構成要素の違いが影響していると考えられた。

### 【結論】

本プログラムは、FA児とそのきょうだいを育てる母親の子育て力の向上に有効であることが示された。プログラムは地域のクリニックや患者会等で広く活用可能であることが示唆された。

## 博士学位論文審査結果の要旨

学籍番号：ND15001（基盤・実践看護学分野）

氏名：石川紀子

論文題目：食物アレルギーをもつ子どもとそのきょうだいを育てる母親の子育て力向上を  
目指したプログラム開発

The program development for improving child-rearing skills of mothers with  
food-allergic children and their siblings

審査日時：2018年9月10日 10:00～11:20

審査場所：演習室2

審査委員：主査 出野慶子教授 副査 福島富士子教授、岸恵美子教授

本研究は、食物アレルギーをもつ子ども（以下、FA児とする）とそのきょうだいを育てる母親の子育て力向上を目指したプログラムを開発し、その効果を検討したものである。

FA児は、アレルゲンとなる食物の摂取・接触により皮膚・粘膜症状が出現したり、アナフィラキシーショックに陥る場合もあるため、母親は日常生活において食事管理や生活環境の調整が必須であり、きょうだいの状況に目を向けることが難しい現状がある。欧米では、発達障害や慢性疾患をもつ子どものきょうだいへの直接的支援が行われているが、日本では障害児のきょうだい支援の研究は散見されるものの、慢性疾患をもつ子どものきょうだいへの支援に関するものはほとんどなく、本研究は母親を介して、きょうだい支援に結びつけようとした点に新奇性がある。

FA児とそのきょうだいを育てる母親を対象とし、6名編成と8名編成の2グループに対して、「子育て力」に焦点を当てた1回90分のプログラムを3回実施する介入を行った。各回のプログラムはテーマに沿って、①情報提供 ②日常生活の振り返り ③グループディスカッション ④きょうだいへの関わり方の目標設定、で構成した。プログラムの効果は、「子育て力」に関する母親の考えや行動の変化、子育て自己効力感尺度、アレルギー症状の出現状況等から分析した。

3回のプログラムをとおして、母親は【きょうだいが置かれている状況や自身の関わり方について振り返る】ことができ、【きょうだいに生じている影響に意識的に関わる行動】【FA児ときょうだいの生活環境を調整する行動】ができていた。これらより、本プログラムが母親の「子育て力」の向上に有効であることが確認された。また、地域のクリニックや患者会などにおいて、本プログラムの活用可能性が示唆された。

審査の過程において、各プログラムの目標達成を検討するにあたり、グループとしての評価だけでなく、参加者個別の観点からも評価を加筆すること、今後の課題や展望について海外での状況も含めて言及すること等が指摘され、加筆修正して論文提出することが求められた。しかしながら、本研究は、FA児の治療に伴って生じるきょうだいへの影響を意識していない母親に気づきを促し、自身の考えや行動の変化を促す独創的なプログラムであることは評価できる。また、慢性疾患をもつ子どものきょうだいへの直接的支援が難しい日本の現状において、母親の「子育て力」の向上に着目したプログラム開発を行い、地域において広く活用することにより、今後のきょうだい支援につながることを期待される。

以上より、博士論文審査会において論文審査ならびに最終試験は合格であるとした。